

神戸言語学会会報第一号の画像紹介

KOTONOHA 編集室

故長田夏樹氏旧蔵の諸資料の中に、神戸言語学会会報第一号がある。このたび長田家よりその画像をご提供いただいた。奥付に「昭和24.7.25」(1949年)発行とある。第一号は「満洲語と女眞語」(長田夏樹著)と「小アジア古代文明の發掘」(岸本通夫著)の二論文を掲載する。学術上の貴重な資料であると判断し、KOTONOHA 編集室の責任において公表することにした。

岸本氏による編集後記によると、発会式から第四回例会までの発表は次の通りであり、会報第一号に納めたのは第三回と第四回の講演要旨である。

発会式	23年11月23日	於神戸外専旧校舎	記念講演「言語学と文字学」	講師	石浜純太郎先生
第二回例会	24年1月22日	於CIE図書館	「埃及探検隊に参加して」	同	広瀬満敏氏
第三回例会	24年3月26日	於同上	「小アジア古代文明の發掘」	同	岸本通夫氏
第四回例会	24年5月22日	於神戸市外国語大学	「満洲語と女眞語」	同	長田夏樹氏

滿 洲 語 と 女 眞 語

長 田 夏 樹

§1) アルタイ語族研究の一環として、滿洲語、女眞語の所属するトゥングース語派が、如何なる厂史的発展傾向を有したかは、史的文献の少ないこの語族の史的比較言語学に必要な資料を提供することは確かであつて、この点からその概要の一般を述べんとするものである。

§2) 狭義の滿洲族即ち、滿洲語或ひはその直接の祖語を話してゐたと考へられるものに肅慎族(息慎、稷慎)がある。既に『山海経』に「大荒中、有山、名曰不咸。有肅慎之國」又『竹書紀年』舜二十五年の條に「息慎來朝、貢弓矢」とあり、『逸周書』王会解にも「稷慎」の名が見えるが、之等先秦文献に記されてゐる肅慎とは何を指して言ふのであるかその厂史、氏族、疆域等は頗る曖昧であつて、『後漢書』卷百十五東夷伝に「遐妻古肅慎國也」とある肅慎や、『日本書紀』欽明天皇五年(544)の肅慎人佐渡に到るの記載、同じく齊明の四年(658)越國守阿部引田臣比羅夫の肅慎討伐等の「アシハセ」「ミシハセ」との関連は推測の域を出たり。次で漢魏の「挹婁」、六朝の「勿吉」、隋唐の「靺鞨」(渤海)宋、元、明の「女眞」(金)は同一民族を根幹とする部族又は國家に與へられた各時代の名稱である。その中靺鞨族の建てに渤海國と日本との國交に就いては『蒙古日本紀』『三代實錄』『日本記略』『日本通史』等に詳しく、二十數回、二百年余の久しきに及んでゐるが、彼等の言語及び文字に関する具體的記載はなされておらず、又近年國都上京龍泉府即ち現在の東京城その他渤海の遺蹟の調査発掘が行はれたが、未だ契丹、西夏、女眞の如き固有の文字が存在してゐたと云ふ実証は與へられてゐない。然し『旧唐書』199 北狄伝に「頗る文字及び書記あり」とあり、又白楽天が渤海國書を読んだと云ふ詠語があるから、今後発見の可能性なしとは云はれまい。

§3) 滿洲語は清朝の支配民族滿洲族の言語であつて南方トゥングース語群に屬し、既に死語と考へられてゐる。現在齊齊哈爾(蒙古語 Kijajar)市内、吉林省扶餘、寧古塔、黑龍江省綏化、北平城内等の老人に記憶してゐるものがあるが、彼等七日常の口頭語としては中國語を用ひてゐる。然るに新疆省の伊犁河に沿つた首府惠遠城(goroki karmara hoton) 迪化(urmūci)喀什噶爾(gasrar)等に四萬餘の滿洲語を話す滿洲族が居るが、彼等の語る言語が舊稱滿洲文語とその音韻体系、語彙に於て如何なる差を示してゐるか資料が無いので不明である。その他ダフル、ソロン、蒙古族に文語として滿洲語を解するものがかなり多い。

滿洲文字は清の太祖が萬曆27年(1599)2月蒙古文字に精通した察爾喀尼巴克什と大臣噶魯札爾圖齊に蒙古文字に基く滿洲語の書寫法を酌定せしめ(之を無圈点文字 *tomggi fukha akū kergen* と云ふ)、次で天聰6年(1632)3月太宗が達達巴克什に命じて、新滿洲文字即ち現行の加圈点文字 *tomggi fukha sindaha kergen* を釐定せしめた。滿洲文字の源をなした蒙古文字は、トルコ系の回紇 *Uigur*、イラン系のソグド *Sogd* の二文字を経て、北セム字の一つであるアラム文字から伝來したものであつて、始めアラビヤ文字と同じく右横書きであつたが回紇に至り、之を縦に起して左から右へ行を進みやうになつた。

満洲語の研究はジュスイット派の宣教師によつて始められ、"Elementa Linguae Tartaricae" "満洲語初歩" が発刊されたのは1696年であつて、未だ中国に於てすら語学書としては沈啓亮の『清書指南』(1671年)、『大清全書』(1683年)が出たばかりで、学習書"tanggū mejen" "清語百條" が出版されたのは乾隆15年(1750)である。"Elementa Linguae Tartaricae" の着者に就いては、ヂェルビヨン Jean François Gerbillon 張誠(1654~1707)であると伝えられてゐたが、ペリオ氏の研究によりフェルビースト Ferdinand Verbiest 南懷仁(1623~1688)であることが明らかにされた。アミオ Jean Joseph Amiot 錢德明(1718~1793)の"Grammaire Tartaro-Mantchoue" Paris 1787 はこの本を根幹として編纂されたものである。

欧人の中国語を研究するものによつて、学び易の満洲語はその媒介となり、中国人の満洲語学習書"tanggū mejen" 及びその系統に属する『清文指要』1818年『三合語錄』(1839年)は中国語の入門書として用ひられた。ウエード式ローマ字の創始者駐華公使 Thomas Francis Wade の『語言自選集』"Yü-yen Tzŭ-erh Chi, A progressive course designed to assist the student of colloquial Chinese as spoken in the capital and the metropolitan department" は、1867年に出版されたものであるが、その214頁の談論篇百章に

我輩見説、你如今学満洲書呢麼、很好、満洲語長短門頭一宗兒要紧的事情、犹像漢人們、各處兒各處兒的牽談一個樣兒、不会快得麼。

とあり華語ではなく満洲語を学ぶことが書いてあるが、それは tanggū mejen の

donjiči 開けは	si あはは	te 今	manju 満洲	bithe 書を	tačimbi 字である	sembi と高はすが	unesi 極めて	sain. 良(こです)	
manju 満洲	gisun 語	serengge は	musei 我々	manjusai 満洲人の	uŭi 第一の	uŭi 最も	oyonggo 急を要する	baita. 事です	
uthai 即ち	nikasai 中国人達の	meni 各	meni 各の	ba 地方	i の	gisun 言葉	i と	adali 同様に	bahanarakūči 理解しないで

Ombio
よいでせうか

の直訳であることが解る。朝鮮及び日本に於ける満洲語字に就いては此處では触れない。

§4.) アルタイ語族はトルコ語派、モンゴル語派、トゥングース語派、朝鮮語、日本語の五語派よりなり、朝鮮語、日本語は姑く置くとしても、残る三首の関係は、シナ、チベット語族に帰属する各語群相互に於けるよりも密切であり、印欧、セム、フィンノイグルの三語派及びドラヴィダ、インドネシア、バントゥ各語派に次ぐ確実さを持つてゐると考へられる。中原と最も関係の深かつた蒙古語とトゥングース語派に属する満洲語が、中国語から多くの文化語彙を借用してゐることは、文化に遅れた民族が隣接せる高度の民族より文化材の輸入と共にそれに肉親した語彙を借用すると云ふ一般通則であつて、印欧語の場合に徴しても明らかであるが、又これに反してこれらが近世官話の発展に少なからざる影響を與へたことは見のがすことの出来ない点である。

アルタイ語族の音韻上の特徴は現にトルコ、モンゴール、トゥングース三語派に存在し、かつて朝鮮語、日本語にも存在してゐる母音調和の現象である。例を蒙古語にとると、男性母音(後舌母音) a, o, u, 女性母音(中舌母音) ä, ö, ü, 中舌母音(前舌母音) i の三つがあり、同一語幹内、及びこれとその接尾辞の間では、男

性母音と女性母音が共存することなく、中舌母音だけが男女いづれとも共存し得るもので

- (1) 男性母音のみよりなるもの balyasun《城》
- (2) 女性母音のみよりなるもの ükär《牛》
- (3) 男性母音と中舌母音よりなるもの ningyan《子》
- (4) 女性母音と中舌母音よりなるもの sirägä《帆》
- (5) 中舌母音のみよりなるもの bičig《本》

の如くである。i は書寫蒙古語に於ては中舌母音であるが、中世蒙古語及びそれ以前に於ては、男性母音 i, 女性母音 i の何れかであつた。アルタイ語族語彙比較の一例として《石》と云ふ単語を挙げると、1889年ロシアのヤドリンツェフによつてオルコン河畔コシツァイダムに於て発見され、1893年デンマークの言語学者トムセン氏によつて解読された關特勤 Kül-tägin の碑は、唐の開元30年(732)の日附を有するものでトルコ語(tü) 最古の文献であるが、現代トルコ諸方言と同じく taš であり、多くの点に於てトルコ語派の古形を有するチュワシ語(čuw) では tšul であるが、書寫蒙古語 čilayun, トングース系(tung.) に属するマネギル、オロチン等では žolo, 朝鮮語(kor) toi, 日本語(jap.) 「ツチ」とは一見相互に關係が無いやうに見えるが、蒙古語 čilayun は uig. biti-《書》= mo. biči- の対応が示す如く *tičayun であり、tü. a = mo. i の關係も tügar《雪》= mo. kirmay <*jir-may《雪打》 tü. yaz-《雪く》= čuw, sir-《id》= mo. jir- <jir-《id》 tü. -š = mo. -i- tü, yeš《深》= čuw, šul = mo. nilbusun <*nit-bu-sun《id》

又 kor. ausant-1 = jap. -ti, -di, -tu, -du も(私は嘗つて「上代日本語とアルタイ語族」(蒙古10巻2号)に於て簡四法則と名付けたが)

kor. pöl《鋒》= jap. pati kor. čul《箭》= jap. sudi

kor. müi《水》= jap. midu kor. toi《石》= jap. tuti《土》により

tü. taš = mo. čilayun = tung. žolo = kor. toi = jap. tuti が証明し得るのである。

§5) 金の太祖(阿骨打)は天輔五年(1121)国字の製作を完顔希尹に命じ女真文字を制定したが、後熙宗(劄剌麻)の天眷元年(1133)新字を作り、皇統五年(1145)廣く之を用ひさせた。希尹により作られたのを女真大字、新製のものを女真小字と云ふ。前者に就いては『金史』卷73完顔希尹傳に「金人初無文字。国号曰陞。契丹国交好。通用契丹字。太祖命希尹。撰本国字。備制度。希尹乃依攸夷人楷字。因契丹字制度。合本国語。制女真字。天輔三年八月字書成。太祖大悅。命頒行之。賜希尹馬一匹衣一襲」とあるが、金の大定年間(1151-1169)に建てられ現に吉林省舒蘭縣城東北小城子に存する「完顔希尹神道碑」には「天輔五年。依本国語製字以進。太祖嘉悅賜衣及御馬。詔頒行」とあり、年代に喰違ひがあるが頒行せしめたのは天輔五年とすべきである。女真大字の碑文と考へられるものに金の天會十二年(1134)陝西省乾州の北關外唐の高宗乾隆無字碑に建てられた「大金皇帝都統涇州郡行記」がある。これは早くも明の趙孟頫の『石墨錄』卷六に載せられ、王昶の『金石萃編』卷百五十四にも記されてゐるが、その拓本を見るに契丹文字と同じ文字が多く、契丹文字により契丹語を記したものの、契丹文字により女真語を記したものか、女真文字により女真語を記したものか三者の中孰れかであると考へられるが、未だ契丹文字そのものが解読されてゐないので不明である。

§6) 女真小字金石文資料は

- (1) 大金得勝陀頌碑 吉林省扶餘縣拉林河畔石炭子にあり、金の世宗が太祖の討遼戰勝を記念するため太祖舊師之地に建てたもので、碑面には漢文、碑陰には女真文を以て刻してゐる。大定25年(1155)7月28日立石。
田村真造「大金得勝陀頌碑の研究」(東洋史研究第2巻5, 6号)
阿田一龜「大金得勝陀頌碑に就いて」(奉天滿鉄圖書館叢刊第12冊)
羅福頤「満洲金石志」卷三, 25
八木榮三郎「満洲舊蹟志」下篇 P. 370
鹿央頤「吉林外記」卷九
- (2) 興屯良窩錢飲碑(奉和題名殘石) 金の大安2年(1210)7月20日?の刻石に係る。
羅福成「奉和題名殘石」(東北叢刊第十七期)
島田好「女真文字興屯良窩錢飲碑」(書畫59)
- (3) 女真進士題名碑(婁古碑) 金の哀宗正大元年(1124)6月15日の刻石、河南省開封縣城内文廟大成

- 殿後方塔聖門内東側に在つたが、河南省立図書館に移されたと聞く。
 桑原騰載「考古遊記」
 羅福成「夏台金源回書碑考」(西学季刊一卷P.687)
 全「夏台金源回書碑文」(考古第五期P179~208)
 (4) 柳河半截山摩崖碑(大金太祖息馬址碑) 遼寧省柳河縣半截山にあり、右に漢文、左に女真文を対列してある。
 山下泰蔵「新女真回書碑に就いて」(奉天図書館叢刊18冊)
 (5) 楊樹林山頂摩崖碑 遼寧省遼寧縣にあり、收国2年(1111)5月5日の文字あるも何年の刻文なるか詳ならず。
 羅福成「女真回書碑考釈」(支那学第5巻4号P103~4)
 羅福頤「滿洲金石志」卷三 55
 楊同桂「女真小字碑」(潘校卷三)
 (6) 高麗北青城半山摩崖碑 朝鮮咸鏡南道北靑郡俗面蒼城里に存す。
 (7) 高麗慶源碑 もと朝鮮咸鏡北道慶源郡東原面禾洞の佛寺址にあつた、1918年京城總督府博物館勅政殿に移置された。
 (8) 永寧寺碑 もと黑龍江口附近特林 T₂r に存したが、今はウラジヴァストーク極東大学博物館に保管され、碑面には漢文と碑陰には女真文、蒙古文と、側面には漢蒙藏女真の四体文字で唱源を以て刻してある。明の永樂11年(1413)9月の刻石。
 内藤虎次郎「蒙古文書」P.85~102, 511~524

(9) 錫林郭勒西浩洛特チヤガン鄂博碑 1945年6月、私の発見したもので、のり種であるが、今後発見される可能性が大きい。以上で解る如く大金得勝陀頌碑と永寧寺碑との間には、227年の差があり、無圈点滿洲文字で記される大金喇嘛法師宝記碑(天聰4年1630)と永寧寺碑との217年の差よりも大である程で、この間に多少の變化はまぬがれない。明朝への教文と対訳した「女真館未文」も、年代の明記してあるものばかりでも永樂12年(1414)から嘉靖19年(1540)の126年に亘つてあるが、これは一定の法式に基き漢文から直訳されて居り時代の差は認められない。「女真館未文」は女真文字音価推定の資料としては重要な資料ではあるが、語法上の誤用が多く文法上、言語学上の資料としては磨滅剝落甚しく判読不能の箇所が多い金石文によるより他方法がない。

87) 女真文字が若し全て表音文字であれば、女真語の解読も、もつと正確に且容易に行はれたであらうが、名詞語根、動詞語根、動詞語根等を示す表意文字によりこれを碍がてゐること正に甚しい。オルコンの突厥碑文が解読され、契丹文字が未だ読み得られないのは前者が完全な表音文字であるのに対し、後者が女真文字と同じく表音、表意の二重文字を合せ用ひてゐるからである。故に、今後女真或は契丹文字の漢文対訳碑文、若しくは西夏語に於ける「番漢合時掌中珠」の如き対訳対音の文書が発見されたとしても、大原次の『華夷訳語』や『元朝秘史』の如き正確な音訳法が採られないかぎり、依然として表意文字の部は如何なる音素と表はしてゐるか曖昧ならざるを得ないであらう。

- 表意文字に就いては相当苦心したもので、次の採は構造を有する。
- (1) 語尾が母音で終る名詞
1. *abka* 《天》 2. *inimggi* 《日》 3. *bia* 《月》 40. *hira* 《河》 45. *ons* 《湖》
 49. *ula* 《江》 79. *ania* 《年》 136. *tasha* 《鹿》 201. *duka* 《門》
 216. *bithe* 《書》 236. *beri* 《弓》 237. *niru* 《矢》 299. *nialma* 《人》 等
- (2) 語尾が *n* で終る名詞、形容詞
- (a) *-an* で終るもの
143. *cha-an* 《牛》 187. *songka-an* 《海青》 239. *mula-an* 《櫓》
 291. *amba-an* 《大》 780. *dilqa-an* 《尹》
- (b) *-in* で終るもの
39. *ali-in* 《山》 50. *usi-in* 《田》 138. *nuci-in* 《馬》 233. *uksin-in* 《田》

580. *ali-in* 《財》 432. *nuci-in* 《和》 479. *hari-in* 《朝廷》 486. *sai-in* 《好》
 (c) *-un* で終るもの
5. *edu-un* 《風》 32. *guru-un* 《国》 286. *ahu-un* 《兄》
 287. *deu-un* 《弟》 290. *egu-un* 《姉》 291. *nehu-un* 《妹》
 564. *ali-un* 《金》 570. *menggu-un* 《銀》 等

- (3) 動詞語根が表意文字のもの
351. *dondi* 《聞く》 355. *dedu* 《睡る》 360. *daha* 《順ふ》
 364. *jaba* 《擲る》 366. *taha* 《得る》 380. *isi* 《至る》
 388. *bandi* 《生れる》 394. *hala* 《改む》 394. *guri* 《遷る》
 422. *yabu* 《歩く》 424. *ili* 《立つ》 425. *sira* 《継ぐ》 等
 (番号は Grube 氏の "Die Sprache und Schrift der Juchen" に依つた。以下同様)

日本語子音が少なくとも上代に於ては *ti, di* であり、蒙古語の *bi či* 《書く》, *širu* 《描く》が原蒙古語では **biti-*, **diru-* であつた如く、滿洲語の *či, ši* の大部分は、他のトゥングース諸語と比較してみても *ti, di* に由来してゐる事が考へられるが、女真語では明らかに *ti, di* であつた。

805. *ta-ti-buru* (塔音卜魯) 《学ぶ》 = *ma. ta či* —
ti が [*ti*] である證據は
 202. *ti-ing* (替因) 《應》 = *chin. t'ing*
 446. *hū-di-la* (忽的刺) 《唱ふ》 = *ma. hūšila* —
di が [*di*] である證據には
 712. *di-gun* (的温) 《乘る》 = 丙種本(去)

即ち *jur. 780 dilqa-an* 《聲》 = *ma. šilgan*, *jur. 388 bandi* 《生る》 = *ma. banji* —, *jur. 383 dir-ga* 《樂む》 = *ma. širga* —, *jur. 351 dondi* 《聞く》 = *ma. donji* — *jur. tu-ti* 《出る、起る》 = *tu či* — 等の対応を示す。

又滿洲語で格助字(後置詞)は既に蒙古語、トルコ語の如き母音調和を失つてゐるが、異格處格 *aktivno-loskativo de*, 対格 *aktivno be* には各々 *de (do), dš (dö)*; *bš (ba?), bš (bä?)* があり、又破動動詞 *-bu-* は *-bš-* (*-bu-*), *-bš-* (*-bü-*?) と男女両形に分れてゐた。處格受格は次のやうに區別して用ひられる。

<i>fo-on</i>	<i>do</i>	<i>asc-on</i>	<i>amba-an</i>	<i>legi</i>	<i>se</i>	<i>gemu</i>	《進V》
詞	は	小	大	官		皆	
<i>we-hei</i>	<i>dö-</i>	<i>fo-lo-</i>	[]	<i>tai-ra-an</i>	<i>ili-</i>	<i>suma</i>	《履I5》
石	は	列	し	寺	(と)	立て	

女真語の動詞活用は未だ多くの不明箇所があるが、滿洲語の副動詞 *-me* も *-mai*, *-mei* の別がある。男性の方の *-mai* は *auslaut i* の影響で *-mäi* となつた爲、他の動詞語尾例へば *-ra*, *-ha* の如く母音調和をなさず、*-me* に同化したのであらう。

その他教詞に於ける如く滿洲語に於ては既に失はれた古い特徴を有するが、滿洲語とは別個の他のトゥングース系の言語ではなくその直接の祖語と考へられ、滿洲文語に対して中古滿洲語と稱することが出来る。(1949.5.22.)

小アジア古代文明の發掘

岸本通夫

この小論の主題は、今世紀初頭 — 1905年より1907年にかけて — 小アジア高原中央部の一寒村 Boğaz köy において、ドイツのアッシリア学者 H. Winckler が行つた發掘を機として、三千年の埋没から突如明らぬに於ることとなつた古代の文明 — Hittite 文明 — に関する事柄であります。

そもそも、この小アジアの地といふのは、アジアからヨーロッパに向つて突出した高原性の半島をなし、あたかもアジアとヨーロッパをつなぐ陸橋のごとき役割を果してゐるために、古来幾多の民族が東から西へ、また西から東へ移動した重要な通路となつて来たことは家知のごとくでありまして、政治史的にも文化的にも特異にしてかつ重要視さるべき一地区であります。それ故に、今日の世界文化の大勢からいふならば、いはば片田舎ではありますが、この地方の諸都市の中には、極めて発祥の古いものが少なくありません。西岸—エーゲ海岸の Izmir は、古くは Smyrna と稱されたギリシヤ時代からの港であり、北岸の黒海に臨む Sinope, Trebizond も前七—八世紀頃からのギリシヤの植民市をそのまゝ今日に至つてゐる港であります。また内陸では、Konya, Kaysarie, Mlars, Malatya 等はバビロン・アッシリヤ時代以上の昔にさへ溯る古都であるらしいことが最近に判明して来て居り、なほ現在トルコの首都なる Ankara も少なくともギリシヤ・ローマ時代からの都市であることが明らかであります。しかしこれらの反面、古代の由緒ある都市で廢墟と化し、または埋没されてしまつたものも多々あるのでありまして、今日の話題の発掘の行はれた Boğaz Köy のごときは左様な埋没せる古都の尤なるもの一であります。いまこゝにその位置をや、詳しく申して見ますと、この小アジアにおける最大の河川は、Kizil Irmak—古名 Halys—河と稱し、Sinope のやや東方、黒海岸のほぼ中央部で海に注いで居りますが、この河の流は大体において西南方向に張り出した円弧状—それも殆ど東北の一部のみが欠けた完全な円形に近い形を爲して居りまして、丁度その円弧の中心に當るのが Boğaz Köy の村と思へばよろしい。首都 Ankara はこれより Kizil Irmak 河を越えて150 軒の西方僅か北寄に當つて居ります。今日でこそ見る影もない寒村であります。素人目にも單線的にはなかなか要害の地のやうに思はれます。

さて、発掘の行はれた場所は大体以上のごとくであります。一体かよやうは片田舎に考古学的発掘の跡を振つて見ようと人が考へるに到つたのは、いかなる経緯からでありませうか、その経緯を尋ねて見ることは同時にこの文明の一面を解説することにもなると思ひますので、尙單に発掘までの事情と顧みて見ることと致します。

さう致しますと、発端はまず我々の会の発回の講演において広瀬氏の御解説を頂戴しましてエジプト文明・象形文字の Champollion による解説—1822年—にまで溯ります。すなはち、この天才の努力によつてエジプト古文書解読の道が開かれるに到り、各地の碑文等が研究されて見ると、あちらこちらの文書に《Ht》の国の民》と言つた言葉が眼に付き、歐洲の學者たちはこれすなはち、旧約聖書に出て来る《ヘテ人》のことであらうと考へたのであります。

そこで旧約聖書に於つてこのヘテ人に関する章句を拾つて見ますと、創世紀・出埃及記・民数紀略・ヨシヤ記・士師記・サムエル書・列王紀略の諸所に、シリア地方に拠つた民族の一として、ヘテ人の記事が散見します。二三の例を挙げて見ると、先づ創世紀第十五章第十八節以下に、エホヴァからアブラハムに與へられたナイル河よりエウフラテス河に到る間の地を占める九民族の一としてその名が見えます。また列王紀略上第十一章第一節にソロモン王の後宮にはヘテ人の婦も見出されたといふ記事、なほサムエル後書第十一章にはダヴィデがある夕暮美しい婦人の浴するのを見て、これを召し寄せたが、これはヘテ人ウリヤなる者の妻であつた。それでダヴィデは一計を案じ、夫のウリヤを敵戦場へ遣ひやつて戦死に到らしめ、その妻を遂に我がものとしたが、《ダヴィデの爲に此事はエホヴァの目に悪かりき》といつたやうな挿話もあります。

一方、十九世紀の半ば頃から、Rawlinson 以下の譯才が輩出して、くさび文字が読めるやうになると、この方面の史料からメソポタミア地方のヘテ人に関する記録が見出されるやうになりました。こゝに特筆すべきは、文字と材料の上から言へば同一系統に属するが、所はナイル河の中流の遺蹟 Tell el Amarna から出土したいはゆるアマルナ文書—1887年—であります。これらのくさび文字で書かれた粘土板文書三百余枚が當時の國際關係・外交關係を明らかにして、古代東方史の研究上いかに大きな意義を有したかは著名な事実であります。こゝにまたヘテ人が登場し、その国王 Suppiluliuma の名がこれらの粘土板の一枚から知られました。時代は前十四世紀、エジプト新王国第十八王朝の頃に當ります。なほ、このアマルナ文書の内には、文字はくさび文字ながら、當時は未知の言語で書かれたものがいくらか見出されましたが、それらの言語の中には今日なほ未解読のものさへあります。

さて、話はやや前後しますが、1833—35年へ掛けて、フランスの考古學者 Ch. Texier なる人が、小アジア各地を周遊して調査を行はれましたが、その間にまたま Boğaz köy においても実地調査を行なひ

何かかなり大きな古代都市の遺蹟の存在を認めましたが、これが當てのヘテ人の王国の首都であつたらうとは知る由もありませんでした。所が1893—94年になつてやはりフランスの考古學者 E. Chantre が、この地の遺蹟から粘土板の破片若干を採集してこれと同国のすぐれた東洋語學者 Scheil 師に送りました所、同師はその言語が同じくくさび文字で記されてはゐるが、何か今迄には知られてゐない言語であることを認め、なほこれこそそのヘテ人の言語であらうと考へて、これを《ヘテ語》と名付けました。

一方、少し前に述べた所のアマルナ文書の未解読言語の一—内容はエジプト王と Arzawa なる国の王との間の往復文書ですが、これをノルウエイの學者 Knudtzon が研究して、1902年どうもその言語は印政系の一言語—御承知の様に英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・ラテン語・ギリシヤ語等歐洲の言語の大部分はインド・ペルシヤの言語と種々の点において顯著な一致を示し、言語學上印政諸族と稱せられる一群を形造つて居ますが、このくさび文字の言語もその仲間らしいと唱へ、かつこれを仮にアルザフ語と稱しました。行く行くこの言語は上のヘテ語すなはち今日の Hittite 語に他ならぬことが判ります。

先づさつと以上の様な経緯を述べた挙句に、Boğaz Köy の地は古い都があつたこと、かつそれが旧約のヘテ人と關係があるらしいとの見當が附く様になり、一ツ徹底的に調べて見ようといふことになつて初めに述べた H. Winckler の三年前にわたる発掘とはなつたのであります。この発掘は見事は成果を挙げ一万余といふ莫大な数の粘土板の断片を得ました。もつとも元來一枚のものが残つても壊れてゐるもの多いため、一万といふ数字が出るので、並合はせて整理すると完全な粘土板としての異数は五百枚—千枚程度といはれて居りますが、その各一枚の大きさは概 30cm に横 20cm、無論最縁に欠けた訳ではありませんが、大体葉巻四枚分程の大きさで、これが紙に二欄に仕切られ、各欄 40—80 行程度横書が標準で、なほ粘土板は表裏二面とも用ひられてゐますから、粘土板一枚と言へば可成り多くの事が記録されてゐる訳でありまして、その千枚と言へば神々大した分量の文献であります。なほこれらの粘土板文書は、コンスタンチノポリ博物館とベルリン国立博物館とへ分けて運ばれました。

さて、これだけの多量の資料が出て来たのでありますから、一ツ大いに研究してみようといふことになつて来たのは當然の勢であります。発掘を行つたのもドイツの學者なら、相当数の粘土板の納まつたのもベルリンの博物館でありますから、当然その研究に着手したのは主としてドイツの學者が中心となりました。それとくさび文字で書かれてゐる事ですから、この種の文字に馴染んでゐる人々、即ちアッシリヤ學者であります。とに再考解読の言語でありますから、我こそ一番槍の功名を争うもの—一生懸命になつたのも無理はありません。たゞ未解読と言つても個々の文字—くさび文字そのものは前世紀以来の研究でまづ正体が判つてとります。発音といひますとやゝ不正確になりますが、要するに一字々々の読み方については大体疑問はないので、書かれてゐる内容—意味をどう読み解か、如何なる文法で書かれた如何なる性質・系統の言語であるか—が残された。しかし重大な問題であつた訳であります。大体の予想はと云へば、メソポタミア文化の圏内に入る地方であり、文字もくさび文字を使つてゐる事でもありますから、おそらくはアッシリヤ語ほどに近いセム系の言語といふことに着着くのではなかつたかといふ風に人々は概して見當を付けて居りました。

それはさておき、発掘された粘土板の内にこの言語—ヒッタイト語—の語句とスミル語・アッシリヤ語との対訳を載せたものが見付かつたので、これが F. Delitzsch の手で「スミル語・アッシリヤ語・ヒッタイト語語彙の断片」と題して出版されました。—1914年—がこれが Boğaz köy 発掘の文書の版になつたものの最初であります。ついで間もなく一番乗の解讀者チエコのアッシリヤ學者 プラーク大学教授 B. Hrozný が名乗を挙げます。彼は1916—17年「ヒッタイト人の言語、その構造及びその印政諸族への帰属・解読の一試論」なる研究を発表し、この未解読の言語の最初の文法書を編むと共に、それが印政系の一言語—英語・フランス語・ギリシヤ語・ラテン語等と親縁關係にあるといふ大胆な假説を唱へたのであります。多くの人の予想を裏切ること余りにも甚しいこの説は、初めの内こそ奇矯の言として迎へられ、學界に大きな波紋を投じて賛否相半はする喧々囂々の論争を捲起しましたが、次第に Hrozný は賛同者を獲得して、印政諸語とヒッタイト語兩者の關係については今日尚大きな問題が残されてはゐますが、その間に密接な親縁關係の存在することについては、今では何人も否定せざるに到つて居ります。Hrozný のこの著は1917年こそはヒッタイト學の誕生した年といふべきであります。

さてそのヒッタイト學—Boğaz köy 発掘文書の内容、更にはこの文明の性質・史等については申上げる事は甚だ多いのであります。余り長くなりますので、丁度として Boğaz köy を首都とするこの古代王国は、二千年紀の始め頃から前1200年頃まで続き、前十四世紀がその絶頂期であつた事を述べるに止めて、最後にやゝ込み入つた事情のあるヒッタイト語の名稱について附説し、この角度から當時の小アジアの錯雑せる民族分布の状況とつながつて、この稿を終

満洲語と女真語

長田夏樹

81) アルタイ語族研究の一環として、満洲語、女真語の所属するトゥングース語派が、如何なる歴史的發展傾向を有したかは、史的文献の少ないこの語族の史的比較言語学に重要な資料を提供することは確かであつて、この点からその概要の一般を述べんとするものである。

82) 扶義の満洲族即ち、満洲語或はその直接の祖語を話してゐたと考へられるものに南樺族(恩模、復模)がある。既に『山海経』に「大荒中、有山、名曰不咸。有南樺之國」又『竹書紀年』第二十五年の條に「恩模未朔、貢弓矢」とあり、『遼周書』王会解にも「復模」の名が見えるが、之等先秦文獻に記されてゐる南樺とは何と指して言ふのであるかその歴史、民族、疆域等は頗る曖昧であつて、『後漢書』卷百十五東夷伝に「遼東古東樺國也」とある南樺や、『日本書紀』欽明天皇五年(544)の南樺人佐渡に到るの記載、同じく齊明の四年(658)越国守阿部引田臣比羅夫の南樺討伐等の「アシハセ」「ミシハセ」との関連は推測の域を出たり。次で漢魏の「挹婁」、六朝の「勿吉」、隋唐の「靺鞨」(渤海)宋、元、明の「女真」(金)は同一民族と根幹とする部族又は國家に與へられた各時代の名稱である。その中靺鞨族の建てた渤海國と日本との國交に就いては『蒙古源流』『三代史略』『日本紀略』『日本遣史』等に詳しく、二十數回、二百年余の久しきに及んでゐるが、彼等の言語及び文字に関する具體的記載はなされておらず、又近年國都上京龍泉府即ち現在の東京城その他渤海の遺蹟の調査発掘が行はれたが、宋の契丹、西夏、女真の如き固有の文字が存在してゐると云ふ実証は與へられてゐない。然し『旧唐書』199 北狄伝に「頭る文字及び書記あり」とあり、又白楽天が渤海國書を読んでと云ふ記述があるから、今後発見の可能性はなしとは云はれまい。

83) 満洲語は清朝の支配民族満洲族の言語であつて南方トゥングース語派に属し、既に死語と考へられてゐる。現在齊齊哈爾(蒙古語 Kijajar)市内、吉林省扶餘、寧古塔、黑龍江省愛理、北平城郊等の老人に記憶してゐるものがあるが、彼等七日常の口頭語としては中国語を用ひてゐる。然るに新疆省の伊犁河に沿つた首府奎遠城(qorokh karmara kotin) 迪化(urmūci)喀什噶爾(gasrar)等に四萬餘の満洲語を話す満洲族が居るが、彼等の語る言語が舊滿洲文語とその音韻体系、語彙に於て如何なる差を示してゐるかの資料が無いので不明である。その他ダフル、ソロン、蒙古族に文語として満洲語を解するものもかなり多い。

満洲文字は清の太祖が萬曆27年(1599)2月蒙古文字に稍通した蒙兀總尼巴克什と大臣噶蓋札爾固齊に蒙古文字に基く満洲語の書寫法を制定せしめ(之を無國点文字 tonggi fukha akū h ugen と云ふ)、次で天聰6年(1632)3月太宗が遼海巴克什に命じて、新滿洲文字即ち現行の加國点文字 tonggi fukha sindaha kergen を制定せしめた。満洲文字の源をなした蒙古文字は、トルコ系の回紇 Uigur、イラン系のソグド Sogd の二文字を経て、北セム字の一つであるアラム文字から転訛したものであつて、始めアラビヤ文字と同じく右横書きであつたのが回紇に至り、之を縦に起して左から右へ行を進ぶやうになつた。

へたいと考へます。そこでこのヒッタイト語といふ名稱がありますが、これは旧約のヘテ人の王國で用ひられた言語だからといふ理由で、この名が與へられた事は、上巻の説明では割諒解頂だけたことと思ひます。所がこの言語がヘテ人の王國に用ひられてゐた一そまでは間違ひなかつたのですが、故にこれをヘテ語一ヒッタイト語と名付ける一といふ所にいささか論理の飛躍があり、歐洲の學者の輕率があつたことが、それも命名の後にはなつて判明して来たのであります。と申しますのは、原文書の疏解研究が詳しくなつて行きますと「ハッテイ語で(Hattili)」即ちヒッタイト語でといふ副詞は我々の名付けたこの印欧系の言語とは全く異なる別の言語に対して用ひられてゐる事が知られて来たのであります。いはそれどころか早まつてヒッタイト語と名付けられた印欧系言語の文章の間にはまたその外に「ルイ語で(luwili)次の如くいふ」とか「ペラ語で(Palaumili)次の如くいふ」、「フルン語で(hurlili)次の如くいふ」の様は前書が附いて、毛色の受つた言語の文章が挿まれて飛出して参ります。つまりヒッタイトの王國內には公用語たる印欧系言語の外四つの土語、合せて五種の言語が用ひられてゐたのであります。遠慮の古代に属する國家でありつら、その構成は言語的に一從つて民族的・人種的にも一 頗る錯綜してゐた訳でありまして、これは甚だ驚くべき事實といはねばなりません。

斯様な次第でヒッタイト語の名稱については種々の學者がとどりの改稱案を提唱致しまして、その間足並は前はず銘々に自分の原案に固執して、自分の論文だけは我通で通してゐますので大變やうこしいのでありますが大勢としては誤つて付けられた名稱なら、粘土板文書の大衆をなす印欧系言語に対しては初めのヒッタイト語(Hittite)の名を保存し、原文書にハッテイ語とある言語は、プロトヒッタイト語(Proto-Hittite)と呼んでゐる例が多い様に見受けられます。

尚この言語で書かれた資料は、粘土板断片五十數片を數へて可成りの量にはなりましたがまだ読めてゐない様子が、コーカス方面の言語と關係があるのだからと云はれてゐますが、またその正体は不明であります。然し乍らこの言語を用ひてゐたハッテイ人は当然ハッテイ地方の原住民であつたものに相違なく、聖書やエジプト文書のヘテ人も本来はこの人種を指したものでありませう。印欧系のヒッタイト語を用ひる民族は北方から悉く歐洲大陸(トラキヤ地方)からヘレスポントを渡つて侵入し、原住民ハッテイ人を征服してその王國を立て、自分等の持つて來た印欧系の言語を公用語として國內の被支配民族に課したものと云ふ見方に見られてをります。

残りの三言語についても極く簡略に述べてみますと、まづルイ語(luwite)と申しますのは、これはやはり印欧系の言語でもヒッタイト語とは極めて近く、たゞこれよりも一般に文法上の語尾などが一層削れてをりますが、何分資料が多くないので詳しいことは不明な点が多い様です。ルイヤといふ地方があり、タウルス山脈以南の地中海岸キリキヤ地方を指すのだらうといはれてゐますが、その方面で用ひられてゐた言語でありまして、ヒッタイト語民族は先立ち印欧系民族の最先鋒となして侵入したが、後來のヒッタイト民族に逐はれたものとされてゐます。

次にフルリ語(hurrite)といふのは、ヒッタイト王國の東南境、アッシリヤに至るまでの中間地帯にミタニといふ王國が介在してをりました。その國の言語でありまして、從つてヒッタイト王國內ではこれは接縁する地方ミタニ系の民族のみに地域に用ひられてゐた訳であります。可成りの量の資料があるのですが、まだ読めてをりません。尚前に申上げたアマルナ文書の中にも、フルリ語で書かれたものがあります。

最後にペラ語であります。これは資料も最も少なく更にその用ひられた地方ペラ地方の方角についてもまだ定説がなく、一番解明の不明な言語であります。何に致しましても余り広いとも言へないこの半島狀の地域に於ても多種多様の言語が既に前二千年紀の古から割據してゐたことは誠に驚くべき事實として人の眼を眩らせたのですが、一面民族移動の橋としての小アジアの天地の歴史地理的性格をよく物語つてゐるやうに思はれます。

ヒッタイト王國の歴史・美術等についてはいづれ追々に機会を得てお話しさせて頂くとしまして今回はこの程度でおさめさせて頂きます。

編輯 夏樹 後 記

○ この度本會に於きましては本誌の様な會報と発行致し毎例会の講演の要旨を中心に會に兩する記事などを纏めて會員の皆様へ御配付する事と致しました。皆様の御協力を仰ぎましてすつと続けて行きたいと考へてをります。
○ 本會も発行以来はや半年になりましたがこの機会に発行以来の足取りを振り返つて見ますと、
発会式 23年11月23日 於神戸外専用校舎 紀念講演「言語学と文字学」 講師 石浜純太郎先生
第二回例会 24年1月22日 於CIE図書館 「埃及探險隊に参加して」 同 広瀬満敏氏
第三回例会 24年3月26日 於同上 「小アジア古代文明の発掘」 同 岸本通夫氏
第四回例会 24年5月22日 於神戸外国語学 「満洲語と女真語」 同 長田夏樹氏
本号に納められたのは第三・第四の例会の講演要旨であります。発会式と第二回例会の御講演に就きましても同様のもの発行致したいのですが委員不行届にてよく整理され記録がなく惱んでをります。去り皆様方の内に記録を止めて居られる方がとられて、神戸市外国語大学内神戸言語學會まで御報頂ければ何より幸です。(M.K)

神戸市灘区徳井土山

神戸市外国語大学内

神戸言語學會発行

(昭和24.7.25.神戸版登印刷)